

# 宗岡中だより



12月号 令和2年12月1日(火)  
志木市上宗岡1-8-1 TEL 048-471-2241

## 「穏やかな 小春日和に 第3波」

校長 佐藤哲浩

今年の11月は昨年と違って、連日穏やかな小春日和が続き、未だ1日中雨になった日がありません。穏やかなのは良いのですが、空気が乾燥しウイルスにとって快適な環境になりつつあります。新型コロナウイルスの感染者が、国内で連日2千人を超え、8都道府県で感染最多、東京でも500人を超え、感染拡大が「第3波」の様相を呈しています。

特に北海道、東京、神奈川では入院患者の病床使用率が急上昇し、軒並み50%を超えて医療の逼迫(ひっぱく)の懸念が高まっています。日本医師会は、「Go to travel」が感染拡大のきっかけになり、「コロナを甘く見ないでください。慣れないでください。」と警鐘を鳴らしているのに対して、政府側は、経済を動かし続けたいがゆえに、「最大限の警戒状況にある」としながらも、経済活動と感染防止を両立させる姿勢は崩していませんでした。しかし、ここにきて政府もようやく「Go to キャンペーン」を見直し、都道府県の感染状況に応じて首長に委ねるようになりました。私自身としては今後医療崩壊に至らず、ワクチンの早期実用化を願うばかりです。

話は変わって、11月23日は今年最後の国民の祝日、勤労感謝の日でした。祝日法第2条には、「勤労をたつとび、生産を祝い、国民がたがいに感謝し合う」とあります。この日は、「働いている人に感謝の気持ちを伝える日」と広く認識されていますが、なぜ23日なのでしょう。実は11月23日は最初から勤労感謝の日だったわけではなく、もともとは新嘗祭(にいなめさい)というお祭りの日とされていたのです。新嘗祭とは、その年に収穫された新米や新酒を神様に捧げ、天皇と国民が一体となって天地自然の神々に感謝し、収穫を喜び合う国民的な祭典です。その歴史は古く一説によると飛鳥時代からあったと言われています。宮中行事のため、庶民にはあまり馴染みがありませんが、新嘗祭は今でも大切な行事として執り行われています。ところが日本が太平洋戦争で負けた後、GHQの占領下のもと、国家神道の色が強い新嘗祭という名前の祭日を排除し、違う名前の祝日にするよう提案があり、そこで制定されたのが現在の勤労感謝の日なのです。現在では農作物の収穫を祝うだけでなく、様々な勤労に対して感謝する日となっています。



日本の高度成長期の頃は、寝食を忘れて打ち込める仕事に出会い、それを全うすることが美德とされていました。それから半世紀が過ぎ、今社会では働き方改革が求められています。時間外労働時間の削減、有給休暇の取得、テレワークの推進等、何年もかけて取り組んでいる課題が、コロナ禍の状況で進んできた感もあるのではないだろうか。